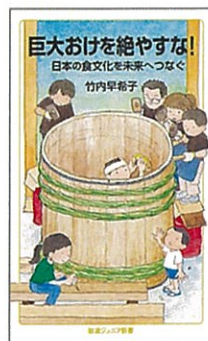


# BOOK TRAIN



## 『巨大おけを 絶やすな!』

日本の食文化を未来へつなぐ

竹内 早希子/著  
岩波書店

日本の発酵文化を支え続けてくれた巨大木桶が、いま消滅しようとしている。小豆島の醤油職人山本康夫氏とその仲間たちは、この大切な伝統技術を残すべく、最後の巨大おけ職人に弟子入りする覚悟を決めた。彼らは言う「難しいからこそ、おもしろいや」と。職人たちの情熱と執念が、読む者の心を大きく揺さぶること必定の一冊である。



## 『おにのまつり』

天川 栄人/著  
講談社

毎年8月に岡山で行われる、鬼の踊りを中心とした祭「うらじゃ」。あさは先生の頼みで、学年の問題児たちと一緒に、その祭に参加することとなった。踊りの練習を重ね、祭の元となった温羅伝説を知るにつれ、それぞれが心に抱えるものを打ち明けあい、それを乗り越えていく。中学生生活最後の夏を鮮やかに描いた青春群像劇。



## 『ダーウィンの ドラゴン』

リンゼイ・ガルビン/作  
千葉 茂樹/訳  
小学館

ダーウィンの助手・シムズ少年は、ガラパゴス諸島を探索中、海に流され無人島にたどり着いた。その島で空飛ぶ巨大ドラゴンにおそわれたシムズは、不思議なトカゲ・ファージングに救われる。彼らは噴火した火山からドラゴンの卵を守るため、溶岩の流れる島を駆け抜ける! 当時のイギリス史実を織り交ぜた大冒険ファンタジー。歴史好きにもおすすめ。



## 『ロンドン・アイの謎』

シヴォーン・ダウド/著  
越前 敏弥/訳  
東京創元社

ロンドンに住むテッドは、コミュニケーションは苦手だが、観察力、思考力に優れている。ある日、アメリカに移住してしまう、おばといとこのサリムが、テッドの家にやって来た。みんなで人気の観覧車ロンドン・アイに乗り出かけるが、乗ったはずのサリムが消えてしまった。出会った時から気持ちを通じあったサリムを探すため、テッドは特異な力を発揮していく。



## 『あした、 弁当を作る。』

ひこ・田中/著  
講談社

中学1年生のタツキは、母が毎日作ってくれる弁当をなぜか食べたくない。隣の席のマシロが自分で弁当を作っていることを知り、タツキも自ら弁当作り始める。「子どもは勉強することが仕事」「男の子は弁当を作らなくていい」「母親の仕事を奪うな」と両親に反対されるが、タツキは頑なに弁当を作り続ける。自立を模索する、タツキの成長物語。



## 『ハーベスト』

花里 真希/著  
講談社

ひとと話すことが大の苦手な黒田は、担任の勧めで園芸部に入る。黒田を含め3人だけの部員は、個性も主張もバラバラ。気まずい雰囲気があったよう中、先行き不安な園芸部の活動が始まった。多種多様な植物が共存する家庭菜園「ポタジェ」の作業を通じて、ぶつかり、協力しあう3人。ありのままにいたることの難しさに直面しながらも、お互いを受け入れていく。



## 『パフィン島の 灯台守』

マイケル・モーパーク/作  
ベンジー・デイヴィス/絵  
佐藤 見果夢/やく  
評論社

灯台守のベンジャミンに沈没寸前の船から救われたアランは、彼が描いた1枚の絵をもらう。その絵を心の支えに過ごした数年後、アランは命を救ってもらった感謝を伝えるため再び灯台を訪れた。怪我をした鳥の看病を通してふたりの絆が深まった頃、アランは戦地へ召集される。平和への思いと年齢を超えた友情、そして情感豊かな挿絵が胸に迫る。

